

<p>上演 4</p> <p>2022年7月31日(土) 4校目</p> <p>近畿 ブロック (大阪府)</p> <p>大谷 高等学校</p> <p>「なんてまでき」</p>	<p>第46回全国高等学校総合文化祭演劇部門 第68回全国高等学校演劇大会</p> <p>講評文</p> <hr/> <p>生徒講評委員会 担当委員</p> <p>(青森県) 青森県立木造高等学校</p> <p>成田 怜史</p>
--	---

パワフルさとシリアスさが同居する、観客の心をぎゅっと掴んで離さない劇だった。

幕が上がると、机を挟んで生徒と先生が座っている。生徒、鹿毛野は自身が原稿用紙に書いた物語を先生に見せていた。彼女が第2章と言って新たな原稿用紙を手渡した瞬間、先生と観客はファンタジーが入り混じる彼女の物語に引き込まれた。その中で描かれていたのは、彼女が過ごした幼少期の壮絶な記憶だった。

舞台を彩る青と緑の照明とスモークが幻想的な空間を作り出していた。それぞれの役者のオーバーな動きは、それだけで会場に笑いが起こり、観客を飽きさせることはなかった。

鹿毛野は、幼少期に母親から虐待を受けていた。母親と血が繋がっていないことが原因だろうか、耐えられなかった彼女は、現実と物語の中で空想の友達を作り出していた。物語の中で、母親の姿は鹿毛野が大好きだった絵本、「魔笛」の悪役である夜の女王と重なる。夜の女王は嫌いか？という問いに、彼女は絞り出すように、「大好き」と答える。虐待を受けても心の奥では母親のことが大好きな彼女の姿は、子供にとって母親がどれだけ大きな存在であるかを考えさせられた。

冒頭と終盤の鹿毛野が白い布に覆われる場面、物語で出てきた神隠しという単語と重なった。講評委員の間では、白い布は彼女が自分を守るバールであるとか、神隠しに会いたいという願望、神隠しとは死を表しているのではないかという意見も挙がった。

物語の終盤、鹿毛野は幼少期に助けてくれた隣の家のおばあさん、天手さんにもらった電話番号に電話をかける。母親と離れ、父親と新たな家族との生活が辛かった彼女だが、天手さんに迷惑はかけられないからと電話をかけられずにいた。そんな彼女に、天手さんは、「もう頑張らなくていい」と電話越しにやさしく抱擁する。この後の天手さんの家での生活が温かいものであると予感させ、彼女が救われたという事実が、多くの観客の胸を打った。

もう一つ、観客の心を打ったシーンがある。小さい頃から反省文を書いて許してもらえないとトラウマを吐露する鹿毛野に、先生が「絶対に許すから」と告げるシーンである。人は助けを求める際に、第一に家族が浮かぶものだ。しかし、彼女の場合、天手さんや先生のように周囲にも味方がいた。私たちが周囲の人に目を向け、時には彼らに助けを求めることが大切で、助けを求めているということに気づかされた。

鹿毛野が、自分が生み出した空想の友達や夜の女王、昔の自分に消えるなど叫ぶシーンは、これらすべてが今の自分を形作るもの、どんなに辛い過去であっても大切なものなんだと伝えているようであった。過去を乗り越えるとは過去を消し去ることではなく、受け入れることなんだと気づかされた。

この作品は、成長しても心に大きな傷を残す児童虐待の残酷さを描き出し、周囲に目を向ければ助けてくれる人がたくさんいることを改めて伝えてくれた、勇気を与えてくれた作品であったように思う。